

子供の体力回復続く

ピーク85年より依然低く

文科省調査

文部科学省は10日の「体育の日」にあわせ、2010年度の体力・運動能力調査結果を公表した。子供の体力は小学男子（11歳）の50メートル走の成績が向上に転じるなど、回復傾向がより顕著になったが、体力のピークとされる1985年頃の水準と比べると、多くの項目で低い状態にとどまっている。文科省では「幼い頃から運動習慣を身につけるなど、体力向上に取り組む必要がある」としている。

上へと転じた。小中高校生の体力テスト合計点の平均は、現行の形式となった98年度以降で最高。しかし、85年頃との比較では、中学男子の50メートル走とハンドボール投げを除き、依然低い水準にとどまっております。ほとんどの年齢層では、「運動をしない」子の割合も増えた。大人（20～64歳）の体力分析では、20～30歳代の体力が低下傾向にあることがわかった。

スポーツ選手派遣広がる

子供の運動能力を高めようと、スポーツ選手らが学校に出向く取り組みが広がっている。

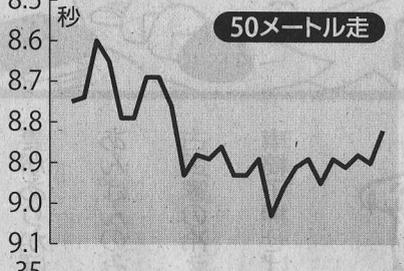
6日、東京都大田区立松仙小学校の5年生の体育の時間に、区内のスポーツクラブ「NPO法人ピポットフット」からバスケットボール選手の斎藤卓さん(32)が派遣された。クラブチームで活躍する斎藤さんは、担任教諭と跳び箱を指導。6段が飛べるようになった豊田耕大君(11)は「手のつき方から教えてくれた」と喜んだ。

文科省は今年度から、全国のスポーツクラブ35団体に委託し、現役選手や元五輪選手を小学校などに派遣し始めた。自治体からの委託を含め、委託先を300程度に増やす目標だ。

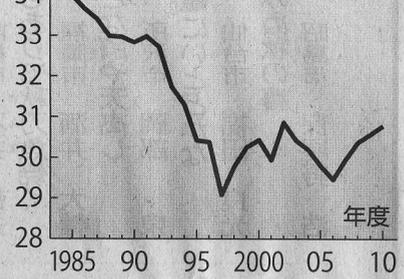
学級担任制の小学校では、体育指導に詳しい教諭ばかりではなく、ベテラン

教諭は実演して見せるのが難しいという問題もある。委託先の一つ「いきいき大東スポーツクラブ」（大阪府大東市）代表の大槻伸吾・大阪産業大教授（スポーツ医学）は「運動の機会が減った子供たちにとっては、アスリートの姿はあこがれる的になる」と話している。

小学生(11歳)男子の記録



ソフトボール投げ



いかに向上の傾向が出ていた。今回は、中学女子(13歳)の持久走、高校女子(16歳)の50メートル走立ち幅跳びでも、前回調査の「横ばい」から向

き方から教えてくれた」と